

2010年6月 松本清張：乱歩コレクションより

昨年は、1909年生まれの作家、松本清張、太宰治、中島敦、埴谷雄高、大岡昇平の生誕100年にあたりました。松本清張（本名：きよはる）は北九州市小倉北区生まれ、15歳で電気会社に就職、18歳で石版印刷所の見習いとなり、その後朝日新聞九州支社で広告版下工となり、35歳（1944年）で召集、韓国で終戦を迎えました。

松本清張の文壇デビューは40歳を過ぎてからで、昭和25年41歳の時に「週刊朝日」の百万人の小説に入選、昭和28年「或る『小倉日記』伝」が第28回芥川賞を受賞、上京して小説家となり、昭和33年49歳の時には、「点と線」「眼の壁」がベストセラー、映画化され社会推理小説ブームの原動力となり、以後数多くの作品を残しました。

日本推理作家協会会長、江戸川乱歩賞選考委員などを務めたほか、「顔」（探偵作家クラブ賞）、「小説帝銀事件」（文藝春秋読者賞）、「日本の黒い霧」（日本ジャーナリスト会議賞）、「昭和史発掘」（吉川英治文学賞、菊池寛賞）など数多くの受賞作があります。

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターには、松本清張の初版本が所蔵されていますが、今回その一部を展示いたします。

立教大学図書館

<展示資料紹介>

1. 松本清張『点と線』光文社 昭和33年2月初版（乱歩コレクションより）
（帯：曾野綾子、波多野完治書評、藤井淑禎氏所蔵）
2. 松本清張『眼の壁』光文社 昭和33年2月初版（乱歩コレクションより）
3. 松本清張『砂の器』光文社 昭和36年7月初版（乱歩コレクションより）
4. 松本清張『松本清張短編総集』講談社 昭和38年（乱歩コレクションより）
（※松本清張より江戸川乱歩への自筆献辞あり）
5. 「松本清張：社会派推理小説の受容」（「週刊朝日百科世界の文学」1328号
2001年6月 藤井淑禎編 p260-263）
6. 藤井淑禎『高度成長期に愛された本たち』岩波書店 2009年



『砂の器』『点と線』『眼の壁』（江戸川乱歩コレクションより）

松本清張と江戸川乱歩

立教大学文学部教授 藤井淑禎（ふじい・ひでただ）

清張と乱歩、何てスリリングで魅力的な顔合わせかと、つくづく思う。漱石と鷗外、大鵬と柏戸、ぐっとマイナーになって舟木と西郷、スピッツとミスチルなど、世に好敵手対決はさまざまあれど、これほどのものはそうそうあるものではない。

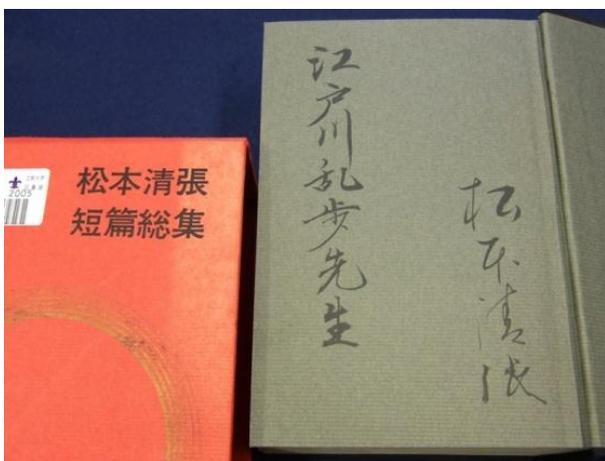
何より、これが「未完の対決」というか、両者が死力を尽くしてぶつかっていない点がポイントで、それがこの対決をいっそう神秘的で魅力的なものにしている。とはいっても、この二人の生涯がすれ違いであったというわけでは決していない。乱歩が亡くなるのは昭和40年で、いっほう清張は昭和32年には「顔」で日本探偵作家クラブ賞を受賞しており、10年前後は活躍時期が重なっているのだから。

そればかりでなく、両者はしばしば仕事を共にしている。座談会で同席したり、有名な東都書房版の日本推理小説大系を他の何人かと編集しているし、『推理小説作法』（昭34）に至っては両者の共同編集だ。ただ、にもかかわらず二人はきちんと対決していないようにボクには見えるのだ。

大御所と新進、といった立場の違いからすれば、乱歩のほうがいろいろ言えそうに思うが、事実は逆で、二人の人間性や性格の違いもあって、好き勝手なことを言ってのけたのは清張のほうだった。乱歩を本格派の領袖と決め付けてその非現実性をおとしめ、その対極に、動機・社会性・人間描写に力点を置いた社会派（もちろんリーダーは清張自身だ）を位置づけ、勢力拡大をはかるという戦略的な作戦を展開したのである。

これに対して、乱歩はどこまでも大人の態度を貫き、清張の戦略的な態度にも寛容だった。しかし、ほんとうは、乱歩もいろいろ言いたかったのではないだろうか。そして清張にいろいろ問い質したかったのではないだろうか。かつて謎解きか文学かをめぐって木々高太郎と激しい論戦を交わしたこともある乱歩であってみれば、「推理と文学との融合に成功」（乱歩の清張評）などという単純な評語では片づけられないものを、清張ミステリーに対して感じていたはずなのだから。

このように生前には二人の本格的な対決は見られなかったわけだが、といってもはや対決は不



可能かということ、必ずしもそうではない。これが文学のありがたいところで、二人の作品や発言は今どうどうと我々の目の前にある。だとしたらそれらをつぶさに比較検討することで「未完の対決」を実現し、決着を付けることは十分に可能なのである。

清張直筆の乱歩宛献辞（乱歩コレクションより）